

# 借行社は

## 過去と未来を継なく

柴田 幹雄 陸自75

「借行社」は、現在新しく創設された元陸自幹部の組織である「陸修会」との「合同」を目指して侃々諤々の議論をしています。

具体的な話はこれからなので、どうなるのか詳細は分かりません。ただ、借行社のことを知らない陸修会の会員も多いと思いますので、その皆様を念頭にこの記事を書いていきます。借行社は明治10年に誕生し、中断はあったとはいえ今年には生誕145年になる長い歴史と伝統を持つ極めてユニークな組織です。「借行」は中国最古の詩篇「無衣」にある「一日緩急あれば衣服を分け合つてでも借<sup>とも</sup>にはせ参じよう」という意味から取っています。また機関誌『借行』の題字は大山巖元帥の手になるものです。

軍事史、戦後史などを研究する学者やジャーナリストで借行社の名前を知らない人はいないでしょう（知らないのは自衛官だけ?）。その歴史

や伝統は少し調べればわかると思いますので、少し違う視点で書いてみます。

### 戦後レジームからの脱却

これは、凶弾に倒れた偉大な宰相、安倍元首相が第1次政権のころから掲げていた言葉です。「戦後レジームからの脱却」とは幅広い意味がありますが、筆者はポツダム宣言受諾による戦後のGHQ政策、その象徴ともいえる米国製の日本憲法を変え切らず、東京裁判史観の残滓をいまだに払しょくできていない日本の現状を、正常な国家国民に生まれ変わらせることだと理解しています。

そんな中で借行社は、GHQ政策、東京裁判史観一色に染まっていたかった、別の言い方をすれば戦後レジームに染まらない、または染まりたくない、足掻いていた少数ない組織の一つと言えるのではないのでしょうか。陸軍悪玉論の中で、ある種の肩身の狭さを感じつつ生きてきた徒前会員（元陸軍将校、陸軍士官学校、幼年学校在籍者など）にとつて、借

行社でだけは東亜戦争を太平洋戦争と言いまえずに会話ができる場所だったのです。また陸軍士官学校の

多くの卒業生が戦死し、56期、57期は卒業生約2千名のうち半数が戦死しています。同期生の半数を失い、自分が生き残っていることに対する複雑な思いを抱きつつ借行社に集い、英霊への追悼、鎮魂の思いを靖國神社に捧げてきました。

陸軍悪玉論に対しても借行社は真摯な対応、反省を行ってきました。日本は東京裁判で東亜戦争を断罪され、憲法、法律、教育、民事、宗教すべてを変えられ、日本が悪いと連合国に反省をさせられました。だが日本は本当に自ら反省をしたのでしょうか。連合国に言われてそれを鵜呑みにして反省した振りをしてい

るだけではないでしょうか。戦後借行社では、各戦域で戦った部隊関係者や司令部参謀、大本営参謀などが会して、座談会形式で当時の実態を語り検証し当時の作戦についてそれぞれの立場でどうであったのかを議論しています。それらは座談会記録として『借行』に掲載され、多くの戦史研究者が参考にしていきます。

いわゆる南京大虐殺に関しても各部隊からの情報を集め、調査をしました。すると意に反して捕虜や市民

に対する不十分な裁判による、また不法な殺害報告が上がり、その数も積算すると1万5千名を超えると、いう結果になりました。参加各部隊の戦闘戦史を含め、『南京戦史』として1989年に発行をしました。借行社は陸軍の代弁者として陸軍悪者論に弁明する一方、日本人として自ら大東亜戦争に対する真摯な検討をする拠点でもあったのです。

借行社はGHQの戦後政策に、蟻螂之斧だったかもしれないませんが、抗してきた、つまり戦後レジームに染まりきらずに生き延びてきた数少ない組織であり、言論空間だったと思います。

## 陸自のルーツは陸軍

大東亜戦争をあれほどの敗戦に突き進めた原因は海軍にあったという論もずいぶん前から言われています。ここではそれを議論するつもりはありません。ただ一つ言いたいことは、戦前の日本も憲法を持ち、立憲君主制の民主主義国家であったという事実は指摘しておきたいと思えます。軍が、嫌がる国民に銃を突き付けて無理やり戦争に駆り立てたものではないということ。とりわけ陸軍

は、徴兵された祖父も父もそして自分も郷土部隊に配置され、土地の人たちにより支えられたのですから。国民から遊離した軍隊ではその存在さえ危うくなります。そうはいっても、戦後一度刷り込まれた陸軍悪玉論は簡単には消えません。その負の遺産を全面的に背負い込まされたのが陸上自衛隊だったと言えましょう。

海上自衛隊は、敗戦の1カ月後には、まだ残っていた海軍省に掃海部ができ、2カ月後に掃海部隊が海軍将兵により編成され、掃海活動を開始しています。海自はその掃海隊から生まれ米海軍と連携し発展してきましたから、海自は自らを日本海軍の末裔であると認識しています。

航空自衛隊は陸軍航空隊と海軍航空隊のパイロットが中心となり米空軍の指導の下発展しました。航空機で飛ぶという技術的合理性が基盤にあり、ジェット戦闘機操縦は米軍に教育を受けるしかなかったせい、か、しがらみは薄いように感じます。しかし奈良の幹部候補生学校の資料館の一番奥には加藤隼戦闘隊の隊長加藤建夫中佐の等身大の木像があります。

陸上自衛隊はどうでしょうか。

マッカーサーは当時と雖も国際社会の現実を無視し、憲法として持つべき条項を欠いた憲法を皇室の存続にかかわることを示唆して日本に押し付けました。こうして日本の非武装化を強要したマッカーサーは、朝鮮戦争が起ると今度は一通の書簡で日本に警察予備隊を創設させました。こうした二重にねじ曲がった理不尽な状況の中から生まれ、その高級幹部には当初内務官僚が就きました。このあたりの事情を『自衛隊創設の苦悩 その実相と宿痾』の著者横地光明氏(陸士60期 元東北方面総監)は次のように表現しています。

「このため警察予備隊は吉田とマッカーサーの庶子で警察の里子で育つ環境を強いられたのである」と。その成り立ちから横地氏の辛辣な表現もその通りだと思えます。しかし、陸上自衛隊が、マッカーサー書簡だけにより、零から生まれ育ったとみるだけでは一面的すぎると思えます。現に創設直後から連隊長以下の指揮官、幹部に戦術能力、部隊指揮能力が必要であるため、陸軍将校や下士官などを採用し、米軍顧問団の監督下ではあるが部隊の指揮、訓

練などを始めました。防大1期生(陸自57期)から10期生くらいまでは文字通り直属上司も部隊指揮官、学校教官も陸軍出身者が主体であったと思います。筆者は19期(75期)ですが、原隊の空挺普通科群長は名幼47期でしたし、空挺団長は陸士54期でした。確かに陸海軍が無条件降伏をして解体され、戦後その機能を回復するための組織を創設されても時間的に断絶があるのは当然です。しかしここで見てきたように陸自もやはり陸軍出身者に育てられ、そのルーツを探れば日本陸軍に行きつきます。日本陸軍が陸上自衛隊のインキュベーターであったことは間違いありません。

筆者が防大学生の時の訓練では、突撃支援射撃3分・2分・3分とお題目のように言われ、着剣し匍匐して突撃していました。教官に「こんな大戦中みたいな突撃ほんとにするんですか」と聞いたら「馬鹿者、大戦中じゃない、日露戦争の時からやっとなるんだ」と言われました。普通科BOCの小隊訓練も、AOCの戦術も戦史で学んだ日本陸軍方式そのままだったように思います。陸上自衛隊はよくも悪くも陸軍の血を引いているのです。

筆者は陸軍悪玉論に与しません、その影響で「いや自衛隊は旧軍とは違いますから」と言ってしまうと、戦史で大東亜戦争の教訓を得てもそれは陸軍の話で自衛隊は関係ない、なってしまうのかと危惧します。山本七平の『二下級将校の見た帝国陸軍』『ある異常体験者の偏見』『日本はなぜ敗れるのか』などを読めば陸軍の欠陥がとて他人ごとと思えず、日本の、また自衛隊の現状に焦燥感を覚えるほどです。

日本陸軍に改善すべきまたは受け入れられない要素は多々ありました。一方、軍隊・自衛隊は国民の民度、情緒、自然環境も含めた日本の風土から切り離しては存在し得ません。これらの土台が共通である以上陸軍の欠陥は陸自の欠陥でもあり得ます。その認識があつてこそ我々は歴史の教訓を自衛隊の進歩発展に生かせるのではないのでしょうか。陸自のルーツは日本陸軍なのです。

### 偕行社は過去と未来を継なく

敗戦でいったん解散させられた偕行社は戦後元陸軍将校などにより再興され、士官学校・幼年学校在籍者そして元自衛官も入会し陸軍にゆか

りのある組織として存続してきました。平成に入り、会員の高齢化でやがて陸軍関係者は居なくなることは自明でした。そこで偕行社は解散して資産をすべて靖國神社に奉納するという会員と、元自衛官に申し送ろうという会員とで大激論となりました。その大変な議論の結果、偕行社を元自会員が受け継ぐことになりました。この時反対派の従前会員から、陸軍と陸自は違う、木に竹を接ぐよいうなものだとか、元自の連中は偕行社の資産目当てで寄ってくるのではないかなどという今から思えば心の痛む発言もあつたと聞いています。しかし同じ陸上での作戦を担い日本を守る陸軍種として、またその生い立ちからして偕行社を陸自出身者が継ぐことはある意味当然といえるでしょう。そして我々元自会員は、偕行社を申し受け、偕行社として発展させていくことを約束したのです。

ここ数年にわたり偕行社は改革検討を重ね、新たな偕行社の理念をかげ、陸上自衛隊の支援を安全保障研究、慰霊顕彰などに加え、事業の主要な柱の一つに据え、定款も変えて態勢を整えました。偕行社は陸自を支援する公益財団法人となったわ

けです。現在すでに実質元自会員で偕行社は運営されています。偕行社が陸自の支援団体として付いている限り、陸自と陸軍の連続性、ルーツが陸軍にあることを認識できるのではないのでしょうか。陸軍とのかかわりがあればこそ、英霊に対する敬意も他人事ではなく我がこととして持ち得るのです。また自衛隊には「戦死」の概念もなく、人事上の取り扱いに戦死はありません。将来台湾有る場合の対応など偕行社ほど考えている団体はないでしょう。

今時代は動いています。5年後か、20年後かはわかりませんが憲法も改正され、陸海空自衛隊は国防軍になるでしょう。陸上自衛隊は陸上国防軍、陸軍になります。

陸軍になります、と書きましたが防衛庁が名前を変えて防衛省になるのとは違います。軍隊ではないと言ってきた自衛隊を一度解散し、軍を創設するという結節が生じます。しかし偕行社が引き続き新国軍を支援する組織として存続すれば、まさに偕行社が陸軍、陸自、そして新たな陸上国防軍を繋ぐボンドの役割を果たし、歴史の継続性の証人になります。

### 偕行社と陸修会との合同について

偕行社と陸修会の合同に際しては、「偕行社」の名称についても議論になっていきます。合同については、偕行社が陸修会に組織的に継承されるという表現がなされています。名称や偕行社の存在意義なども含めすべてを継承してもらえ、強く希望します。歴史もブランド価値もある偕行社の名まえを継承しないのは大変もったいないと思います。

名は体を表すと言います。偕行社が「偕行社」の名称を失えばその組織は文字通り偕行社ではなくなり偕行社としての伝統や考えなどは自然に希薄化していくのではないでしょう。名称が陸自OB/OG会を表す名称となれば、戦後生まれの自衛隊だけを対象とするメンタリティーが強くなってしまうでしょう。いまだに残る理不尽な陸軍悪者論の十字架を背負わされているは陸上自衛隊です。その理不尽さに当事者意識をもつて対応できるのは陸軍にゆかりのある偕行社だけなのです。

現在も大東亜戦争従軍将兵の家族から多様な相談や遺品処理の問い合わせが来ます。偕行社はこういったニーズにもきめ細かく対応していま

す。NHKのファミリーヒストリーにも軍歴調査で協力しています。そういうったニーズに「私たちは陸自の会ですの、ちよつとわかりません」ということになりはしないか心配です。少数ながらも二世会員もいます。年齢からしてあと20年は在籍するでしょう。

また、陸軍との関係を希薄化され、陸自のOB/OG会的色合いが濃くなれば、各地偕行会にとつて、隊友会との住みわけができにくくなります。特に陸自の駐屯地しかない県や地域ではなおさらでしょう。陸軍墓地、慰霊碑などへの関心も薄れるのではと思います。

偕行社の名に執着する理由はこういったところにあるのです。

### 歴史と伝統を将来へ継ぐ

若いころ、在米日本大使館で防衛駐在官として勤務した時、米陸軍の音楽祭のようなイベントを見る機会がありました。米陸軍バンドの演奏もよかったです。印象に残ったのは、米陸軍の歴史を示すパフォーマンスでした。それはジョージ・ワシントン率いる大陸軍の将兵の軍服と装備を持った数名に始ま

り、各時代の軍服・戦闘服をきたそれぞれ1個分隊ほどの隊員による展示でした。独立戦争時代から西部開拓の騎兵隊、南北戦争、第1次大戦、第2次大戦、朝鮮戦争、ベトナム戦争、そして最後は湾岸戦争の砂漠迷彩の兵士まで次々登場しました。

米国は日本と違い歴史のない国、と思っていたのに、このような歴史パフォーマンスを見せられ、大変うらやましく思いました。日本ですら明治維新の官軍の姿から始めるだろうか、いやそうではなく戦前とは切れているという認識で、自衛隊時代だけになるのだろうかと思ひ、大変寂しく思つたものです。

現職のころから陸自と陸軍の連続性に思い至り、『偕行』にも投稿したことがあり、最近は特にその認識を新たにしています。

軍事組織には、誇るに足る栄光と伝統があつて初めて規律・団結・士気が上がるのです。将来新国防軍ができたときに「日本陸軍、陸上自衛隊、そして国防軍と変遷はあつたが、我々は明治建軍以来一貫して日本防衛の任に当たってきました」という言葉が、普通に出てくるような時代につなげるよう、偕行社がお手伝

いできるのではないでしょうか。またそれが「戦後レジームからの脱却」ではないかと勝手に思つています。